"おっぱいタッチ"が流行った治安の悪い小学校のお話

キーンコーンカーンコーン。

4時間目の終わりを告げるチャイムが学校に響く。
午前中の授業が終わり、待ちに待った昼休みの時間だ。

このクラスでは、2学期に入った頃から「おっぱいタッチ」という遊びが、男子たちの間で大流行していた。
最初はクラスのやんちゃなグループの男子たちが、テレビの芸人のノリを真似して「うおー！」と叫びながら女子

に向かってダイブしたり飛びついたりするだけの、バカバカしい悪ノリだった。しかし、そのおふざけが毎日何度も繰り返されるうちに、だんだんと形を変えていった。

最初におっぱいを触ったのは佐藤だ。

佐藤はみんなで騒いで女子を追いかけ回したり、ダイブしたりしていたが、その時に女の子の身体に触れるたび、ちょっとエッチな気分になっていた。最初はただふざけてるつもりだけだったのに、次第に目的が変わってきていた。
クラスの女子たちの体に対する興味が、他の誰よりも強くなっていた。

「おっぱい、触ってみたいな・・・。1人で、何気ないフリをしてさりげなく触れ

ば、女子だって、わざと当たったのかと思って大騒ぎはしないはずだ」

佐藤は自分の席に座ったまま、教科書を片付けるフリをして、じっと教室の中を見渡した。どの女子がどこで何をしているかを細かくチェックした。

教室の前の方では、女子2人が黒板を拭いていた。後ろの方では、何人かの女子が集まって話して笑っていた。

「よし、今だ」

佐藤はすっと立ち上がった。手には次に使う算数のノートを1冊だけ持っていた。「ロッカーに物をしまいに行く」という理由を周りに見せるためだった。佐藤はゆっくりと歩き始めた。

佐藤が狙いを定めたのは、教室の後ろにあるロッカーの前で、友達とのお

しゃべりに夢中になっている女子だった。その女子、佳奈は佐藤が近づいていることに全く気づいていなかった。

佐藤は最初からそのロッカーに用事があるかのような顔をして、まっすぐ歩いていった。顔は正面を向いたまま、目線も動かさない。

そして佳奈のすぐ横をすれ違う、その瞬間だった。

佐藤は自分の右手を、体からほんの少しだけ外側に開いた。本当に数センチだけの動きだった。歩くときの自然な手の振りを装いながら、すれ違いざまに手のひらを、佳奈の胸の横側にサッと滑らせた。